

## まえがき

見えないけれどもあるのは、昼の星だけでなく、角筆の凹み文字もその一つである。この角筆の世界はどこまで広がっているのだろうか。そんな疑問に取り憑かれて、この四半世紀にわたって、その世界を尋ね歩くや、それは日本列島全域から中国大陆そして朝鮮半島にまで広がっていた。

それぞれの角筆の凹み文字は何の役に立ったのだろうか。角筆の文字を読み解くことで何が分かるのか。新たに分かったことが毛筆に培われた言語文化の知見をどう変えることになったのか。さらなる課題が生じた。

角筆は、箸一本の形で、象牙や堅い木や竹で作り、一端を筆先の形に削り、そのとがらせた先端を和紙などの面に押し当てて凹ませて迹を付け、文字や絵などを書いた。毛筆が主な筆記具であった時代に、今日の鉛筆のように使われ、毛筆と並んでそれを補うもう一つの筆記具であった。毛筆が黒や朱などの色で文字や絵を記すのに対して、角筆の文字は光と影で浮かび上がる凹線である。それは視覚に訴えることが弱く目立ちにくいために、今まで古文獻の研究者などから昼の星のごとくに見逃されてきた。

この角筆の凹み文字と初めて出逢ったのは、さらに四半世紀を遡る五〇年ほど前である。その平安時代の不思議な文字に秘められた未知の世界を追って、まず「かくひち」という名称を王朝物語から探し出し、

次いで角筆の遺物、角筆で書かれた文献の時代と用途、その言葉の性格などを謎解きのようにして抉り出し、『角筆のみちびく世界』(中公新書、一九八九年)に披露した。

そこでは、人々から忘れ去られていた角筆の文字の世界を掘り起こしたが、角筆の基礎的な概念をとらえたに過ぎなかった。角筆の世界が毛筆の言語文化とどう係わるのか、角筆の発見がどう働きかけるのかという掘り下げは残された課題であった。

本書は、その課題について、この四半世紀の探査の旅で見出された角筆の古文書を資料として、その発見の記録とともに、いくつかの視点から語ろうとするものである。

筆記具としての角筆は、毛筆と異なるいくつかの特性を持っている。色が着かないので目立たない、墨継ぎの不便さがない、神聖な經典の紙面を汚さない、旅に持って行ける、などである。この特性のどの面を強調して使うかによって、角筆の文献の性格も異なってくる。目立たない点を強調すれば、秘かな意志表示となり、墨継ぎの不便さがない点では、師の講義を聴講する時のメモ書に適し、貴重な紙面を汚さない点では、經典読誦の迹を記入するのに便となる。いずれにも、凹みであることが背景にある。

これらの特性を視点として、秘かな意志表示の三話、近世の藩校などの聴講の角筆メモで全国的に遺存する資料から見えてきた方言史に係わる三話と、東アジアにおける經典読誦の迹を記入した角筆点の語る、東アジアの言語文化の交流の問題にまで至る四話の、全十話で本書を構成した。各話の間には直接の関連はない。あるのは角筆発見の記録である。したがって一つのテーマを一貫して説くという体裁をとっていない。それは角筆の文献が持つ多様性の然らしめるところである。狙いは、一つの事柄だけでなく、角筆

の多様な文献によって、毛筆の文献で描かれてきた言語文化史のあれこれにわたって、新しい光を当てることにあり、その緒を示すことにある。

あるのに見えなかったものが、角筆という眼鏡をかけることで見えてくる。そうして見えてくる新文献がまだまだ多量にあるだろうことを、これまでの探査の旅で感じた。すでに見つけた角筆の文献にも分析と考察を深めることで新しい文化価値を見出す余地がある。眼を変えればさらなる発見もあろう。角筆の眼鏡をかけるとは、物理的な眼鏡ではなく、角筆という新しい知識を身につけることである。それによって、こんな面白いことが分かるんだ、文化史に新しい光が当たるんだと悟ることになる。本書を通じて一人でも多くの人に、この世界に興味を持っていただき、さらには発見への夢を抱く人によるこの世界の発展を期待している。



# 目次

まえがき

## 第I部 日本国内での発見

第一話 白紙の手紙——高野長英 脱獄の意志表示…………… 3

1 爪書の正体 3

小伝馬町牢屋敷の出火／「獄中爪書」との出会い／「獄中爪書」の解説

2 角筆詩文のねらい 11

いつ、誰が書いたか／詩文の宛先／入牢の理由／角筆詩文四枚の順序とその内容  
／「拙作」のありか／白紙に凹み文字で書いた意図

3 脱獄、そして逃亡 23

小伝馬町牢屋敷の出火の原因／事件後の牢屋敷取締りの強化／脱獄後の長英の足取り／鳥井耀蔵の執拗な追跡／高野長英の最期／残された謎

第二話 白紙の記録——記録に託した真情…………… 35

1 松崎渋谷衛門暗殺事件顛末 35

松崎渋谷衛門暗殺事件／疑獄の結末と関係者の処分

2 和算を記した角筆小型本 40

白紙の小型本／『算法通書』との比較

3 角筆小型本のねらい 47

どこで、いつ書いたか／誰が書いたか／角筆の小型本が伝えようとしたこと

第三話 白紙の遺書——平井収二郎 角筆に込めた真情…………… 55

1 平井収二郎切腹の顛末 55

暁に首落つ／青蓮院宮令旨事件／平井収二郎の切腹

2 角筆の遺書に残る「恨」の文字 64

3 中江兆民「平井収次郎君切腹の現状」 69

第四話 江戸時代の全国の方言——方言史をひらく…………… 73

1 高野長英の東北弁 73

人相書に記された発音／長英『鳥の鳴声』の用語／『鳥の鳴声』原本の東北弁／

長英の毛筆の手紙の東北弁

2 三浦命助の「獄中記」 80

「獄中記」の東北弁／命助の「露頭状」

3 藩校の教科書の角筆文字 84

4 庶民の学習本の角筆文字 88

近世方言書のある土地／近世方言書のない土地

5 江戸時代における「買ッテ」と「買ウテ」の分布 94

第五話 角筆の書いた東北方言——角筆文献の言葉の分析…………… 97

1 藩校教科書に角筆で書かれた庄内方言 97

致道館版／致道館版毛詩の角筆文字／角筆文字と墨書仮名

2 東北方言の角筆資料を追う 109

「庄内 鶴ヶ岡 三日町 中村」の黒印／北奥羽の角筆資料

第六話 「見よう」の誕生——この現代語誕生の土壌…………… 117

1 方言に残った昔の発音 117

「今日」を「キュウ」と発音する現代の方言／近世方言書に記された全国各地の

発音

2 角筆資料で全国分布を知る 123

広島県の角筆資料／中国地方の角筆資料／四国地方の角筆資料／九州地方の角筆資料／北陸地方の角筆資料／関東地方の角筆資料／中部地方の角筆資料／近畿地方の角筆資料

3 「見よう」誕生の土壌 135

「見よう」の成立／全国的な広がり

4 二種類の才段長音 140

発生の原因／開合の区別の消失／「見よう」の誕生

## 第Ⅱ部 東アジアへの広がり

### 第七話 勞幹先生——漢代木簡の角筆文字を追う……………147

1 『居延漢簡』注記への着目 147

中国での墓探し／左側の字の無き処に刻文有り／居延筆の先端

2 中国での角筆調査 153

北京考古研究所にて／武威漢簡から刻文を確認

3 『居延漢簡』との邂逅 158

勞幹先生は生きていた／二十五年來の夢の実現／居延筆の「鋭頂之木」の先端



第八話 敦煌文書の角筆文字——中国の角筆紙文書……………169

1 大英図書館の調査 169

ヒースロー空港にて／太平洋で針を探す／角筆スコープの使用制限／調査初日の  
落胆／角筆文字の発見／『観音経』の角筆加點／敦煌文書の角筆加點

2 ヨーロッパの第二次・第三次調査 179

第二次調査／第三次調査／朱点と角筆点

3 東アジア所在の敦煌文書 184

台北市国家図書館蔵の敦煌文書／龍谷大学蔵敦煌文書

4 角筆加點の言語文化史上の位置 186

第九話 韓国の角筆文献——ヲコト点の源流……………189

1 韓国における角筆文献初調査 189

韓国調査の動機／韓国からの返事／第一次訪韓調査

2 角筆点吐の発見とその解説 197

『初雕高麗版』から角筆点吐を発見／帰国後の発見報告／第二次訪韓調査／第三  
次訪韓調査／第四次訪韓調査／第五次訪韓調査／韓国における解説の成果

3 韓国の角筆点吐と日本のヲコト点との比較 214

ヲコト点とは／角筆点吐とヲコト点の共通点／角筆点吐とヲコト点の相違点／ヲ

コト点の起源

- 4 宋版一切経の角筆の点 226

醍醐寺蔵宋版一切経／宋版一切経の角筆点

第十話 角筆で書いた新羅語の発見——片仮名の先蹤…………… 233

- 1 東大寺に伝わった華嚴経 233

新羅経の発見／僚巻の東大寺蔵本から角筆文字を発見

- 2 八世紀の東大寺における新羅との交流 239

正倉院文書に残る新羅高僧の撰述書／正倉院外に存する新羅高僧の撰述書／大谷  
大学蔵『判比量論』の角筆書き入れ／『判比量論』の伝来と審祥／東大寺と審祥  
の華嚴経初講説

- 3 新羅華嚴経の角筆文字の解読 252

- 4 日本の經典の初期訓読の源流 262

新羅經典の訓読と日本の經典訓読との親近性／片仮名の源流

参考資料 277

角筆で新しい夢を見る——あとがきにかえて 281

第I部 日本国内での発見



# ・第一話・白紙の手紙

——高野長英 脱獄の意志表示

## 1 爪書の正体

### 小伝馬町牢屋敷の出火

天保十五年（一八四四）辰ノ年六月二十九日の夜八ツ時（午前二時）過ぎ、江戸の小伝馬町こでんまちょうの牢屋敷から出火した。火の出た場所は御様場おだめしば（刀の試し斬りを行なう場所）の物置であった。火を見つけたのは、この夜、百姓牢（百姓などを収容した二八畳敷ほどの大部屋）の不寝番に当たった飯番めしばんの金助である。百姓牢は御様場の隣にある建物で、この時は五〇人が入っていた。揚屋あがりや（御家人・僧侶・医師・山伏などを収容した座敷牢）の一三人と合わせて、六三人の囚人が急火により切放された。百姓牢の五〇人は、鑑役かぎやくの彦根金次郎が入口を開け、牢見廻り役の高橋伊三郎の立会いのもと、一時解き放された。

月番の南町奉行所の鳥居甲斐守とがら（糶藏もちぞう）が出馬したが、火は町火消が来る前に鎮火した。切り放された囚人のうち、揚屋の一人と百姓牢の六人とは、指定場所の廻向院えきういんに帰らなかつた。

六人のなかの一人は、高野長英<sup>たかのちやうえい</sup>であった。その高野長英の手配書と人相書が、江戸南町奉行の鳥居耀藏配下の同心らから諸地方に配られた。鳥居耀藏は長英の召捕りを厳しく申し渡し、手広く追跡を始めた。

六月二十九日といえば、当時は月の運行で暦を定めたから、夏の終りの月末であり、八ツ時は月のない闇夜である。そんな夜に、牢屋敷の御様場<sup>ごさまば</sup>という人気の全くないはずのところから、なぜ火が出たのであろうか。切り放しされた高野長英は、なぜ指定場所に帰らなかつたのであろうか。その高野長英を町奉行の鳥居耀藏が執拗にまで追跡したのは、なぜであらうか。

それを解く鍵が、白紙に凹み文字で書かれた手紙に隠されていた。

### 「獄中爪書」との出会い

平成六年（一九九四）一月下旬のある日、仏像などのレプリカ製作で知られる京都科学の副部長から、思いがけない電話が入った。爪書<sup>つめがき</sup>の古文書の複製を依頼されたが、初めてのことなので知恵を借りたいという趣旨であった。爪書という物件の内容をやや詳しく聞いてみると、どうやら角筆で書いたものらしい。翌日早速に自宅の広島から京都に出かけて実見することにした。

それは紛れもなく、角筆で書いた文字であった。和紙の紙面を凹ませて書いた漢字の文章が、三五行にわたり、合計二〇〇字余り認められた。一見したところでは全くの白紙である。漢字一字の大きさは、およそタテ一・五センチメートル、ヨコ一・〇センチメートルで、筆圧は力強く、筆画の点や線の一点一画がしっかり書かれて凹んでいる。中でもヨコの線に特徴があり、その最終の押さえに力が入って、クレータ



図1 高野長英の獄中角筆詩文(個人蔵, 高野長英記念館に寄託)

1のように丸く凹んでいる。永字八法(「永」の字の字画に備わっている八通りの筆の運び方)の「磔」(斜めのはらい)の最終画も押さえてあるので、紙が凹みこれもクレーターのように見える。「趯」(漢字の跳ね)もしつかり跳ねてある。これらの筆画は、爪では到底書けるものではない。今までに調べて何度も見てきた古文

献の角筆による凹みと同じである(図1)。

文章の内容は、四通の手紙であるが、漢詩とその跋文(あとがき)を書き並べたような体裁に工夫してある。現状は、その四通を糊づけして、一巻の巻物に仕立ててある。その巻首の部分と巻末の一首とは、紙が摩耗し汚損しているために、凹みの文字がほとんど読めない状態になっている。手紙に用いた紙は、江戸時代に普通に使われた楮紙(コウゾの樹皮から作った和紙)四枚を使っている。それぞれタテが一・二・一センチメートルで、ヨコは、一枚目が一七・六センチメートル、二枚目が倍近い三二・七センチメートル、三枚目が一七・四センチメートル、四枚目が一・二七センチメートルである。この四枚がそれぞれの端を糊で付け合わされて、一巻の巻物にされ、素木軸が付けられ、表紙を茶色の布で覆っている。表紙には白紙の題簽を貼り、外題を別筆の墨書で「獄中爪書茂木寛之丞」と書いてある。この外題は、後世に巻物に仕立てたときに、持主の茂木家の人物が書き加えたものである。

## 「獄中爪書」の解読

全文が凹み文字で書かれた四通の手紙の複製品を作製するためには、まず凹み文字の全文を読み解かなければならない。しかし、巻首の第一枚目に書かれた四行は、各行頭の一字から三字が摩耗したり破損したりして読みにくい。巻末の、第四枚目も二行目から最終行までの合計五行は、凹みが薄いうえに紙が劣化してしまい、文字はその紙の折れ目や皺に重なったり摩耗したりして読み解くのは不可能に近い。

第三枚目に書かれた跋文の四行のうち後半の二行も極めて読みにくい、という状態であった。今まで解読できずに放置されてきたのも無理からぬことである。その他の箇所も字句については、既にいくつかの試読がなされているが解読に異同が見られ、現物について検討し確認する必要がある。

そこで、数年前に角筆の凹みを読解するための機器の「角筆スコープ」を開発した吉沢康和氏（広島大学名誉教授、産業技術短期大学教授・当時）に協力を頼み、藤田恵子氏（産業技術短期大学講師・当時）の助力を得て、尼崎市の産業技術短期大学の研究室において、折良く新たに開発された顕微鏡付きの「角筆マイクロスコープ」を活用して今まで読めなかった凹み文字の解読にかかった。平成六年二月二十八日より作業を始め、四月十二日に一応の読解を終えた。角筆マイクロスコープの光で捉えたわずかな凹み文字の筆画を手がかりにして、その漢字の全体を復元し確認する手間のかかる作業を一字一字について行なった。そのそれぞれの文字の復元の作業過程は別に説いたごとくである。こうして再度の修正を加えて、複製品の点検と諸問題を処理して、京都科学におけるすべての作業が終わったのは、六月十七日夜であった。



<p>嘗盟勿頸號男兒  <small>今日分憂果是誰</small>  <small>已得乾坤未棄扶</small>  <small>安無再會謝恩時</small></p> <p>右呈  <small>茂君足下</small></p>	<p>(紙繼)</p> <p>嘗占窮厄得明夷  <small>微運已知不可驟留</small>  <small>誤觸龍鱗履厄尼</small>  <small>長存鶴膝屈鷓兒</small>  <small>晴陰鎖戶畫當暗</small>  <small>霜露沾衣夜更悲</small>  <small>心緒萬分難說盡</small>  <small>夢魂偶會故人時</small></p> <p>右述懷  <small>白首彎腰不厭忙</small></p>
<p>危厨細事指揮詳  <small>折聲半夜驚殘夢</small>  <small>身在獄中主座傍</small></p> <p>右夢夢</p> <p>(紙繼)</p> <p>十二年前高劫妨  <small>蹶原上梓枝斃北</small>  <small>星移物換事還空</small>  <small>徐唱佛名送夕陽</small></p>	<p>(紙繼)</p> <p>右前辰歲初蹶蹶原  <small>捩要今茲同支在</small>  <small>獄中追想累昔不</small>  <small>堪悲悶賦</small></p> <p>三拾五年為罪人  <small>苦處卽危廬孤身</small>  <small>苦辛世界秋風急</small>  <small>世間孤霜先斂節</small>  <small>歲既移甲辰我之</small>  <small>苦處表一</small></p> <p><small>三拾五年十一月廿二日 若尾龍雄</small></p>

図2 「獄中爪書」解説全文

解説した四み文字の全文は、上に示した通りである(図2)。

第一枚目には、「右呈、茂君足下」の後書あとがきがある。「嘗盟勿頸」で始まる四行の漢詩が書かれている。第一詩とする。第二枚目には、「右述懷」の後書がある。「嘗占窮厄」で始まる八行の漢詩と、「右夢夢」の後書がある。「白首彎腰」で始まる四行の漢詩が書かれている。それぞれ第二詩、第三詩とする。第三枚目は、「右前辰歲」の跋文のある「十二年前」で始まる四行の漢詩が書かれている。これを第四詩とする。第四枚目は、「歲既移甲辰」の跋文のある「三拾五年」で始まる四行の漢詩が書かれている。第五詩とする。

この五つの漢詩と跋文とから成る「詩文」が全文である。

これを読み下してみよう。

(第一枚目、第一詩文)

嘗て勿頸を盟ひしは、幾男児

今日、憂ひを分かつは、果して是れ誰ぞ

歎び得たり、乾坤、未だ我を棄てざるを

豈、再会して恩に謝する時、無からんや

右、呈す

茂君の足下に

【注】勿頸―生死をともしする親しい交際／乾坤―天地／豈……無からんや―どうして……無からるか、あるであろう／  
茂君―前沢にいる従兄弟の茂木恭一郎／足下―同輩に対する敬称

(第二枚目、第二詩文)

嘗て窮厄を占ひて、明夷を得たり

微運、已に医すべからざるを知れり

誤ちて龍鱗に触れ、虎の尾を履めり

長く鶴膝を存し、鷗児に屈せり

晴陰、戸を鎖して、昼、当に暗し「濛暗たり」

霜露、衣を沾して、夜、更に悲し「悲惨たり」

心緒、萬に分かれしは、説き尽し難し

夢魂むこん、偶なまたま、故人に会へる時

右は述懐

【注】窮厄―危難にあつて苦しむこと／明夷―易えきの卦けの一つ。賢者が志を得ず、暗君に遭つて禍をこうむつたこと／微運―ふしあわせ／龍鱗―龍のうろこ。「虎の尾を履めり」と合わせて、『夢物語』を書いて幕府の逆鱗にふれたことをいう／鶴膝―長年の牢生活で、脚の肉が落ちてやせ細り鶴の脚のようになったこと／鷗尼―かもめの子ども／晴陰―晴れと曇り／濛暗―曇つて暗い様子／惨悲―悲しく嘆かわしい様／心緒―心のうごき／夢魂―夢をみている間の魂

(第二枚目、第三詩文)

白首はくしゆ、彎腰わんよう、忙しさを厭いとはず

庖厨ほうちゆうの細事さいじ、指揮ついまひ、詳つまひらかなり

析声せきせい、半夜はんや、残夢を驚おどかす

身は獄中の主座の傍そばらに在あり

右は母を夢みる

【注】白首―しらがあたま／彎腰―腰の曲がつた様子。「白首」と合わせて老母の姿をさす／庖厨―だいどころ／析声―拍子木ひょうしき(削つた長方形の木を二個打ち合わせて鳴らすもの)の音／半夜―まよなか／残夢―目覚めてなお残る夢／こち―主座の傍―牢名主

(第三枚目、第四詩文)

十二年前、麴坊こうじぼうに寓ぐうし

医原の上梓、校讐に忙しかりき

星移り、物換り、事、還、変れり

徐に仏名を唱へて、夕陽を送る

右は、前の辰の歳、医原枢要を刻し

今、茲に同じ支、獄中に在りて

曩昔を追想し、悲悶の(張)るに堪へず

【注】十二年前—天保三年(二八三三)壬辰の年／麴坊—江戸麴町貝坂の住い／萬—仮住いする／医原—『西説医原枢要』。  
天保三年に巻一が出版された／上梓—本を出版すること。昔は梓あずで作った版木に文字を彫って印刷した／校讐—書籍を  
出版する前に字句を読み合わせて誤脱を正すこと／同じ支—十二支のえと。ここでは天保十五年(二八四四)甲辰の年／  
曩昔—むかし／悲悶—悲しみもだえ

(第四枚目、第五詩文)

三拾五の年に罪人と為る

善廬、遭厄し、孤身を慮る

苦辛の世界、秋風、急なり

世間の孤霜に、先づ節臻る

歳、既に甲辰に移り、我が

苦慮の一を表はす